

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 22 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25350931

研究課題名(和文)対話による探究のコミュニティ形成を通じた場のセーフティに関する研究

研究課題名(英文)Study on Safe Place formation by Dialogue and Community of Inquiry

研究代表者

本間 直樹 (HOMMA, NAOKI)

大阪大学・COデザインセンター・准教授

研究者番号：90303990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：セーフな探究のコミュニティ Safe Community of Inquiry: SCol は互いの知的表現を認めあい関係や活動を学習者が自ら創造する過程である。本研究は4つの課題、1 Colによる場の生成に関するアクションリサーチ：地域の学校や施設での継続的な対話活動の実施、参与者協働での対話学習環境の改善とツール開発、2映像記録を利用したプログラム作成：映像記録を導入したSCol活動、3実践者との連携：多文化、貧困などの状況下でSColを実践する海外の研究者と連携した調査、4セーフティ概念の明確化：ケアリング、インクルージョン、パレーシアなどの諸概念とセーフティの関係の解明、を行なった。

研究成果の概要(英文)：Safe Community of Inquiry (SCol) is a process by which students acknowledge each other's intellectual expression and create their own relationships and activities themselves. This research consists of four tasks. (1) Action research on community building by SCol: Continuous dialogue activities at local schools and improvement of dialogue learning environment in collaboration with participants, tool development, (2) SCol activities with video recording, (3) Studies in collaboration with overseas researchers who practice SCol under circumstances such as multicultural, poverty, etc. (4) Clarification of safety concepts: elucidation of safety concept in connection with notions such as caring, inclusion, and parrhesia.

研究分野：哲学

キーワード：対話 こどもの哲学 コミュニティ セーフティ

1. 研究開始当初の背景

「子どものための哲学 (Philosophy for Children)」は、初等教育から中等教育において対話による探究を目指す教育実践である。報告者は、アメリカ、フランス、イギリス、オーストラリア、メキシコ、ハワイ、韓国の各地域における実践者・研究者と連携して調査研究を行い、日本における実践のための課題を明らかにし、地域の初等・中等・高等教育の現場に対話の学びの導入を試み、そのための教育・学習プログラムの研究と検証を重ねて来た。

この対話の学びは、学習者が周囲の環境との相互作用を通して学びそのものを創造する過程であり、既成の知識群や価値体系に沿って個的・段階的・直線的に進行するのではなく、学習者と先導者のあいだで往還を繰り返しながら協働して形成される活動である。報告者は「子どもから大人へ向かう学習」と「大人が子どもを指導する教育」という枠組みを根本から捉え直し、「子どもの哲学」という新しい名称の下で、対話を通して協働して思考する学習プログラムを考案した。このプログラムの研究を通して、とりわけ対話を通してコミュニティの生成する場がとりわけ重要であると考えた。

2. 研究の目的

セーフな探究のコミュニティ Safe Community of Inquiry (以下、SCoIと略す)は、身体と声による活動によって、互いの知的表現を認め合い、さまざまな創造的関係や活動を生み出す実践であり、学習の環境を学習者が自ら創造していく過程である。そのために、身体・感情・知的活動の三つの点でセーフ safe である場の生成が鍵となる。本研究は、この探究のコミュニティとセーフな場の創造に焦点をあて、子どもたちの対話による探究のコミュニティの形成を通じた場のセーフティとはいかなるものか、それはコミュニティの参加者のどのような経験からつくられるのか、場のセーフティはどのような概念によって規定されるのか、これらを明らかにすることが本研究の課題である。

3. 研究の方法

探究のコミュニティとセーフティの本質的な関係を見極めるために、調査対象、手法、概念の点から課題を4つに分け、これらを相互に関連づけて研究を組み立てる。

1. SCoIによる場の生成に関するアクションリサーチ: 地域の学校や施設において

継続的な対話活動を実施し、参加者とともに対話・学習環境の改善や向上、現場で使えるツール開発を図る。

2. **映像記録を利用したプログラム作成:** 参加者の理解を得て映像記録を導入し、探究のコミュニティ活動の細部を参加者とともに振り返り、映像についての対話をベースにした検証を行う。
3. **実践者との連携:** 多文化、貧困などの状況において子どもたちとの探究のコミュニティを実践し、"Intellectual Safety" (知的な活動のためのセーフティ)を重視する海外の研究者と連携し、セーフティに関する調査を行う。
4. **セーフティ概念の明確化:** 上記プログラムと関連させて諸文献を参照し、ケアリング、インクルージョン、ヴァルネラビリティなどのセーフティに深く関わる概念を定義し、それらの関係を明らかにする。

4. 研究成果

4.1. SCoIによる場の生成に関するアクションリサーチ

4.1.1. 研究協力者とともにSCoIの手法を用いた授業や対話ワークショップを継続的に実施した。まず、「コミュニティボール」というツールを用いて円になって身近な話題について話しあう対話型授業を地域の公立小学校で継続し、学校生活に関わる問題について子どもたち自身が考える場をつくるほか、学校以外の場所においても地域の国際交流協会と連携して外国にルーツをもつ子どもたちのための対話ワークショップを毎年実施し、コミュニティボールだけではなく、ビデオカメラを用いたインタビュー式対話や散歩をしながら問答をする新しい探究のためのプログラムを考案した。

公立高校においても同様にコミュニティボールを用いた対話型授業を継続したが、試験や大学受験というプレッシャーのなか、授業という枠組みでは自由な知的探究に取り組みにくいと思われる場合、生徒会活動やクラブ活動など課外活動を使って探究のコミュニティを実施することにより、生徒たちの身近な問題をじぶんたちで考え、解決するためのセーフな場を提供することができた。

また学力困難校といわれる高校にて、自尊心や自己肯定感のもちにくい生徒たちのために、安心して自己表現や協働活動に取り組めるための授業プログラムを担当教員とともに創案し、いじめ経験者、外国にルーツをも

ち日本語使用に不安をもつひとたちなど多様な生徒が安心して学ぶことのできるための1年間の教案を作成し、プログラム検証と改善を重ねた。こうした学習改善に関わる試みをハワイ大学発祥の取り組みである「フィロソファー・イン・レジデンス」としてまとめ、事例集を作成した。

4.1.2. 高校での映像記録を用いての対話

過去の研究成果である、東日本大震災で被災した東北の中高生との対話の映像記録を、研究協力者（沖縄県の社会科高校教員）と他の社会科教員が担当する高校倫理や現代社会の授業、生徒会、ホームルーム活動などを利用して、沖縄本島、宮古島の6つの高校で生徒に観てもらい、その内容を踏まえて自分たちが話し合いたいことを考え、探究を行った。沖縄の多くの高校生たちは、福島における原発事故と沖縄における基地問題を結びつけ、負担が一部の地域に偏っていることや地域格差をどう考えるか、他の地域の人はいくつかの問題をどう捉えているのかということなどを問いとして立てて話しあった。

こどもの哲学の創始者の一人、M・リップマンは「教室が探究のコミュニティに変容する」(M.Lipman, *Philosophy in the Classroom*, Temple University Press, 1980, p.45.)ことが重要だと述べている。この「探究のコミュニティへの変容」は、単に同じクラスの人、授業、同じ場、同じ行為に参加しているという意味での形式的な集団性を越えて、対話者相互の関係性が変化し、「関わりたい、話したい」という内発的な動機のもとに「ともに考える」という新しいレベルの協働性が生まれ、発展していくプロセスを指している。これは最後に述べる関心のケアリングに該当する。そして映像を介することで、異なる地域の同世代の若者の間に、探究のコミュニティが成立しうることが確認された。

また、震災について同じ中高生が語る様子から、生徒たちはみずから沖縄に米軍基地が集中していることについて問いを立て、沖縄本島や宮古島の置かれている歴史的背景や社会的位置、沖縄人、日本人としてのアイデンティティについて話し合うことができた。沖縄では高校生が基地問題について発言することは決してめずらしいことではないが、県内でもさまざまな立場があり、セーフに話しあえる環境は少ないといわれる。そのような状況のなか、自分たちの住んでいる地域の抱える問題をセーフな環境で話しあえるた

めの糸口を、数回の試みではあったが提供できたことは評価できる。基地問題のみならず、沖縄人、日本人としてのアイデンティティの問題も複雑であり、地域の伝統的な話しあいとは区別されるセーフティを重視した対話の場が意味をもつことも協力教員たちのあいで確認された。

さらに、研究協力者の転属にともない、SCoIの理念に基づいた哲学対話の実践を導入している沖縄県立宮古高校を訪問し、社会科の授業を受講生や、教員の呼びかけで放課後集まった哲学対話に関心がある生徒たちとの哲学対話を実施した。授業のなかである生徒の言動によってセーフな対話の場や探究が損なわれることがあるという教員からの課題を受けて、カード型の教材を有効に用いることにより、適切な対話への参加を促すことができることを確認し、SCoIを授業のなかで作っていくための具体的な助言等を行った。また、哲学対話の授業を受けていない生徒にもそうした対話へのニーズがあることから、他の高校でも行なっている放課後、生徒が任意に参加する（哲学クラブなどの）対話の場の可能性を提案した。また、これらの実践研究の成果として、沖縄県内で行われた対話の発言を記録し、また次の対話のための教材となる資料集「p4c in Okinawa」を作成したほか、セーフに探究を深めるための質問のツール（哲学者の工具箱）をハワイでの実践を参考にして作成した。

4.2. 映像記録を利用したプログラム作成

地域の多文化共生センターにて研究分担者とともにビデオカメラを用いた映像ワークショップを開催し、ビデオインタビュー形式で子どもたちどうし、子どもから大人への質問を行なった。子どもたちの撮影した映像を全員で見せ合いながら対話が行なわれた。映像メディアの導入に際しても、SCoIの手法を重視し、研究者が一方向的に映像記録を撮るという非対称性を取り払い、コミュニティボールの代わりに一台のビデオカメラを参加者ひとりひとり順に回すなど、にコミュニティの全員が記録と視聴の両方に参加できるように工夫がなされた。

とりわけ映像記録は子どもたちによる積極的な探究を促す重要な道具となる。ビデオカメラを導入することにより、「相手の話をよく聴こう」といった大人の働きかけがなくとも（逆にそういった働きかけは子どもたちを受動的にしてしまう）子どもたちは能動的に対話に臨み、カメラのファインダー越し

に、相手の答える様子を具に観察し、さらに質問を考えながら対話という見えにくい作業を可視化・実行していった。またこうやって作られた記録を全員で確認することでじぶんたちの活動を対象化して考察することが容易になることが明らかになった。

4.3. 実践者との連携

ブラジル、リオデジャネイロ州立大学にて貧困地域でのこどもの哲学を実施しているウォルター・オマール・コーハン教授が来日したのを利用して、対話ワークショップを大阪大学にて開催し、楽器を用いた対話など、新しい対話法について学び、それをじっさいに地域の子もたちとともに行った。言語に偏りがちな対話を楽器や音などの感性的素材をうまく用いて導入することにより、子どもたちの自由な発想力を活かした探究のあり方について考察できた。こうしたコーハン教授の実践から学ぶことにより、対話活動が単なる意見交換やおしゃべりではなく、考えること、書くこと、問題を解決することを円パワース、広義の識字教育につながるということが明らかになった。

4.4. セーフティ 概念の明確化

哲学対話に関連する諸文献を調べることにより、セーフティを構成する諸概念について以下のような考察を行なった。

《intellectually safe community》は、身体や感情だけでなく、知る、考えるという知的態度や活動におけるセーフティを意味している。ジッドゥ・クリシュナムルティによれば、わたしたちは防衛や防衛によって守られた安全や安心、セキュリティを求めることによって、かえって不安や恐れを生み出しているという。クリシュナムルティのいう「観察 observation」「選択のない気づき choiceless awareness」という態度が SCoI 実践の中核に位置している。

まず、セーフティとセキュリティの違いが重要となる。「安心できる」という今日よく用いられるフレーズは、守られて居心地のいい状態にとどまり、どちらかといえば他人と没交渉になる状態、と理解されやすい。「安心」という語は「守られている状態」「居心地のよさ」、つまりセキュリティと混同され、他人とのあいだにある垣根を越えるよりは、それに守られることを望む状態として受け取られやすい。セキュリティは、不安と恐れに支配されている。そしてその不安と恐れに対抗するために、多くの人は権威や力に依存

してしまう。知的なセーフティは、そのようなセキュリティとは区別された、解放された知の態度である。

また、セーフティは古代哲学に由来する「パレーシア」つまり、ありのままに話す、率直に語る、という実践と密接な関係をもつ。話されていることがらと話しているひととが、一つのものとして他人の前で現れる場が対話である。パレーシアの実践では、自己を変容させなければいけない。つまり、話す者は、「自我」とか「思考」とかいう見えない容れ物のなかに隠されているのではなく、見られ、感じられ、聴かれ、触れられるものとして、コミュニティのなかに現れる話すわたしに変わる。人は、話すことを通して、じぶん自身をコミュニティへと包摂する。話すわたしはコミュニティにとって不可欠な一部となり、そのコミュニティは、じぶんや他人を外に閉め出すのとは逆に、インクルーシヴ（包摂的）となる。

探究と対話が進められるためには、インクルーシヴな問いかけが重要な鍵となる。

問いかけは常にじぶんたちへの問いかけである。わたしたちがある場や状況をどう感じているか、何を恐れているか、脅かされると感じるか。感じ、話し、聴き、理解するとき、わたしたちは何をバリアと感じているか。わたしが表現したり、考えようとしたりするときに何がそれを遮っているのか。それらは、強ばり、威嚇、萎縮などの身体の緊張がつくるバリア、無感情、非共感、反感といった感情のバリア、さらに、理解の拒絶、非難、自負、観念への固執などの知的なバリアである。こうしたバリアは、わたしの存在の脆さを守ってくれるどころか、わたしをコミュニティから排除し、コミュニティへの包摂を遮る障壁とさえなってしまう。わたしたちが、話すことを通して、自身を他者に対して示し、わたしたちが身体、感情、知的理解の三つの意味で脆い存在であることを認めあうことによって、対話はじぶんたちの変容と解放、そしてケアの場となる。

つまり、対話のなかで、身体的・感情的・知的なセーフティを配慮するとは、じぶん自身へと注意を向けること、じぶん自身をケアすることなしにはありえない。そして、じぶん自身がケアできなければ、他者に対しても配慮を向けることはできない。身体的緊張が解けないかぎり、対話の場は始まらない。じぶんの感情に無自覚な者は、気づかぬ間に他者の心情を害するかもしれない。じぶんの知的理解に不安を感じる者は、攻撃や防衛によ

って他者の知的理解を損なうかもしれない。こうした強ばりは対話にとってのバリアとなる。

こうした注意深さはケアリングの態度である。ケアリングの態度は、孤立した自己の利害にとられるのではなく、じぶんと他人とが分裂せずに関係しあうところに注意を向ける。セキュリティは保身に向かうが、ケアリングは関係のなかにある自己と他者に注意深く関与する。ケアリングにおいて、危険とセーフティは裏表の関係にある。ケアすることは、利己的ないし利他的に計算される結果としての行為でも、ある目的のために合意を通して調整された行動でもなく、じぶんや他人への関係、まわりの物事への関係、ある考えに対する関係のなかで、プラスであるにせよマイナスであるにせよ、すでにはじめられてしまっている関与を発展させていくことである。SCoI は、討論や論証という「論＝ロゴス」を中心とした言語コミュニケーションとは異なり、その場で生きているじぶんや他人へのケアの営みを自覚し、そのなかで生まれることばの世話をしながら、生きることを学ぶ活動である。

以上により、探究のコミュニティにおけるセーフティは、解放、注意、観察、選択のない気づき、パレーシア、インクルージョン、ケアリングの諸概念に導かれた態度・行為であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

高橋綾、本間直樹、震災について対話する こどもの哲学 の可能性、Communication-Design、査読有、9、2013、21-41

本間直樹、辻明典、荻野亮一、映像記録を活用して対話経験を理解する、Communication-Design、査読有、9、2013、43-57

高橋綾、本間直樹、川崎唯史、ケアの「人間化のために：淀川キリスト教病院における、対話を取り入れた臨床倫理検討会についての考察、Communication-Design、査読有、11、2014、1-25

本間直樹、金和永、高橋綾他、哲学相談のコミュニティ・アプローチとしてのフィロソファー・イン・レジデンス、philosophers、査読無、1、6-32

高橋綾、哲学対話とスピリチュアルケア、Co*Design、査読有、1、2017、25-44

[学会発表](計4件)

本間直樹、考える人は美しい、日本哲学会、2013年5月10日、御茶の水女子大学

本間直樹、コミュニケーションデザインとしての対話、システム制御情報学会、2015年5月22日、大阪大学

本間直樹、臨床哲学と対話、日本ホスピス緩和ケア協会 2015年度年次大会、2015年7月18日、東京ビッグサイト
高橋綾、本間直樹、Safe Community of Inquiry と死の臨床、第40回死の臨床研究会年次大会、2016年10月9日、札幌コンベンションセンター

[図書](計1件)

本間直樹・高橋綾、大阪大学出版、『こどもの哲学』、2017、350

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

本間直樹 (HOMMA, Naoki)

大阪大学 CO デザインセンター・准教授

研究者番号：90303990

(2)研究分担者

久保田 徹 (KUBOTA, Tetsu)

大阪音楽大学音楽学部・准教授

研究者番号：50420427

(3)連携研究者

高橋綾 (TAKAHASHI, Aya)

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター・特任研究員
研究者番号：50598787

(4)研究協力者

トーマス・ジャクソン (JACKSON, Thomas)
ハワイ州立大学 (アメリカ合衆国)・教授

ウォルター・オマール・コーハン (KOHAN, Walter Omar)
リオデジャネイロ州立大学 (ブラジル)・教授

松川絵里 (MATSUKAWA, Eri)
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター・特任研究員

安谷屋剛夫 (ADANIYA, Takao)
沖縄県立宮高校教諭